

引きこもり案じの僕… ～サヨナラ…ボクノヘヤ～

このお話は、引きこもり案じの僕と、僕の家族の物語。

引きこもり。それが何かはわかるだろう。
僕は、引きこもりだ。

僕は、家族との間に見えない壁を作っていた。
だが、あることが起き、それがきっかけで壁が壊れる。
最初はイヤだった。
でも、次第に変わって行く。

このお話は、引きこもり案じの僕が、あるきっかけで変わって行く物語。

「ご飯よー。」

飯か…。まっいいや、いつもの事だし。行かなくても勝手に持ってくるだろう…。

僕はかなりの引きこもりだ。

なのに…僕には部屋が無い。

引きこもりにとって、引きこもる場所が無いのは、かなり致命的だ。

では、僕が、こんな家でどうやって引きこもっているかという、まず、家の隅に荷物を運ぶ。

そしたら、天井からビニールシートを垂らして、はいおしまい。

こんな所プライバシーもへったくれも無い。

だから、もっといい引きこもりができる所に引っ越そうと思う。

その計画がこれだ。

テーマ「サヨナラボクノヘヤ ～アラタナヘヤへ～」

内容：今の部屋とは言えない部屋を抜け出し、家の敷地内に新たに部屋を作る。

材料：色々

材料費：分からないけどかなり

製作者：僕

自分で作るんだ。すごいだろ!?

僕は、高校で建築を習っているから造れる。多分…。

まあ、こんな感じで頑張ろうと思う。

今日は飯食って、風呂入ったら寝るから…おやすみ…。

言い忘れていたけど、今は夏休みが始まったばかりだから学校は休みだ。

次の日

…昨日言い忘れていた事がある。部屋の中をどんな感じにするかだ。

今考えている僕の理想の部屋は、こんな感じだ。

まず、ロフト。そして、大量の収納。これは絶対に欲しい。あとは、ベッドとテレビとパソコンとゲームがあればいい。部屋の広さはそんなに広くなくていい。事実、僕は意外と狭い所が好きだ。それに、引きこもるのにそんなに広い所はいらない。いざとなれば、ロフトにも行ける。

周りから見たら普通の部屋かもしれない。

だが、家の角で暮らしているのに比べたら…僕にとっては天国だ。
これで、自分の空間ができる！
考えただけでも笑いが込み上げてくる。
さっそく設計図を描こうと準備をしていると、ドアいや、ビニールシートが開いた。
オヤジだ。オヤジが来るのは珍しい。だが、僕はそんな事気にも留めず作業を続けた。だが、この後のオヤジの言葉により、作業は中断された。
「リフォームするから自分の部屋をどんな感じにしたいか、考えとけ。」
なんの前触れもなく、そう言った。
「・・・」
言葉が出なかった。嬉しすぎて…。

この日から、僕の世界が変わった。
もう設計図は書かなくていいし、材料費もいらぬ。
自分の空間ができる。さっきとは違う。何もしなくてもいい。
嬉しい。すごく。
思いっきり喜んだらオヤジに引かれた。
けど気にしない。
嬉しすぎて、この日はずっとニヤニヤしていた。

次の日
僕は、朝から、
「おはよう!!」
そう言って居間に行った。
今度は家族みんなに引かれた。
けど気にしない。
オヤジに部屋の案を渡して、部屋とは言えない部屋に戻った。
その日もずっとニヤニヤしていた。

時間は経ち夏休みの半ば、リフォームが始まり、僕たちは近くのアパートに一時的に引っ越している。
完成が楽しみだ。
いつの間にか学校が始まっている。もちろん行っていない。

アパートの生活にも慣れ始めたある日。

「完成したぞ！」

オヤジが帰ってくるなりそう言った。

僕は、どんな感じか知らないから、ワクワクが止まらない。

次の日

「・・・」

失望した…。

外観も内観もいいと思う。僕の部屋だってある。

周りからみたらいい家だろう。

でも、失望した…。

まず、部屋に扉が付いていない。あと、天井もない。

部屋の前はリビングだ。

何でも、いつでも家族を感じられるようにとか何とか。わけわからん。

またも、僕の部屋にはプライバシーがない。

唯一あるとすれば、ロフト位だ。

あの紙にはプライバシーなんて書かなかったけど、書かなかったけど…。

僕だって、ずっと引きこもっているつもりなんてない。

何かきっかけが欲しかった。新しい家ができて、変われると思った。

だが、そううまくいくはずがない。現実は違う。

僕はロフトへ行き、布団を敷いて、その布団に包まった。

布団の中で、「サヨナラボクノヘヤ」計画を、またやろうと思ったのだが、リフォームした時に余計なものを作ったらしく、空いている敷地がないので、それは諦めた。

その日は、いつの間にか寝てしまっていた。

次の日

トイレ行くために、下に降りたら、

「おはよう！」

みんなに言われた。

さすがに返さないとまずいと思ったので、小さい声で返した。

その後はトイレに行き、ロフトに戻った。

これといってすることもなし、勉強もしないとまずいので下に降りて、勉強していると、家族の話している声が直接聞こえてくる。

話の内容は、意外と面白かった。

その日から、僕はちよくちよく下に行き、勉強をしているフリをしながら、家族の話を聞いている。

別に下に降りなくても話は聞ける。

でも、話している人の表情を見ると面白い。

だから、僕は下に行くのだと思う。

そんな生活が続いていたある日、

「そんな所で盗み聞きしないでこっちにくれいいのに。」

盗み聞きしていることがバレていないとは思っていなかったが、そんなに率直に言われるとは…。

僕は恥ずかしくなってロフトに逃げて、その日はそこで過ごした。

僕もあの輪の中に入ってみたい。

目が覚めて最初にそう思った。

あいにく家には誰もいない。

寂しい。孤独だ。

「？」

昔はそんな事思わなかった。

孤独が当たり前だった…。

だが今は違う。

寂しい。孤独だ。寂しい。孤独だ。寂しい。孤独だ。

「ガチャ」

誰かが帰ってきた。

出迎えると、

「どうしたの？」

と、聞かれた。

でもそんな事はどうでもいい。

リビングへ行き、色々な話をした。

夜になるとみんな帰ってきたので、みんなで話をした。

楽しい。話すのがこんなに楽しいなんて知らなかった。

楽しい！

この頃、よくみんなで話している。
最近気付いたのだが、この家は部屋の入り口が、家の中心を向いている。
それに、一部を除き各部屋にはドアがない。
だから、自然と家の中心に集まるようになっているみたいだ。

昔は自分の空間にいた。
でも、僕は今、家族の空間にいる。
まだ、自分の空間にいることも多いけど、家族の空間にいるのが楽しい。
中心に集まる。みんなで、話す。テレビを見る。ゲームをする。
それが楽しい！

家族の空間・自分の空間
自分の空間・家族の空間
まだ、家族の空間には慣れていないけど…、
家族の空間にいる方が多くなりたい。
この思いを忘れない。

そして僕は変わっていく…。